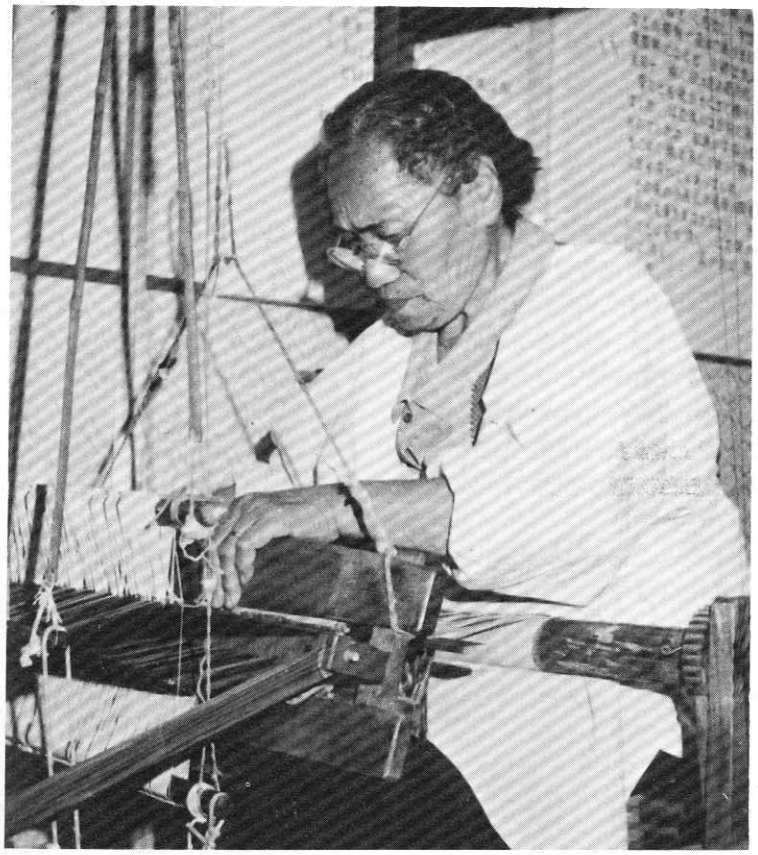
三　島　市　　（通巻第４号）

郷土館だより

Vol. II No.4
1979. 8. 1



（ハタゴ）
ハタゴの調整をする、高畑きよさん
（明治32年５月11日生・三島市竹倉在住）

目　次

沢地地区の民俗をたずねて(1)…… 1
郷土史の散歩道(4)…… 3
テーマ展「頼朝と郷土」報告…… 5
講座「頼朝とふるさと」報告…… 6
おしらせ・その他…… 7

郷土館フィールドワークから

沢地地区の民俗をたずねて(1)

館員（学芸員）　杉村　斉

沢地

沢地は三島駅の北東方向、箱根西麓の山裾に位置する小さい谷間（あい）の集落である。旧北上（きたうえ）村に属していたが、北上村が三島市と合併して以来、沢地の谷を挟んだ両側の丘陵地には、千枚原、富士ビレッジ、光ヶ丘等の新興住宅地が造整されて、今は昔の閑村の面影はしのばれない。さらに古い記録によれば、後北条の時代から江戸時代にかけて、この地は箱根権現の神領であった。そのため、沢地は田方郡に属していて、三島と同じく君沢郡になったのは明治の初めであった。白隠禅師で有名な臨済宗妙心寺派の禅寺、龍沢寺は、この地にある。龍沢地開山の記録によっても、沢地が箱根権現の神領であったことがわかる。現在の千枚原住宅の下には、縄文時代から古墳時代まで人間がそこで生活を営んだと思われる複合遺跡が発堀調査を終わって埋蔵されている。この地が古代人にとって、住むために適当な地であったことがうかがえるわけである。

今回のフィールドワーク報告は、沢地の古老下里三郎氏（沢地 431、M41年２月８日生）と神山一氏（沢地 882－２、M38年９月11日生）のお二人の案内で、集落から箱根山頂に向う古道沿いに歩きながらうかがった伝説のいくつかをお知らせしたい。

怒り石

上沢地の集落を通り過ぎると家は一軒も無くなる。谷は急に狭くなって、段々状の水田が道の両側につくられている。道より一段と低い水田の中に怒り石はあった。なぜ怒り石なのだろうと考えているところへ、すぐ神山さんの説明があった。「この石に小便をかけると翌日雨になる。」ということであった。石が怒って雨を降らすのである。このことは、村人がみだりに野に小便を放つ行儀の悪さを戒めたものであろうか。あるいは、いつか偶然に雨が降ったことがあって、言いひろめられたものであろうか。面白い話だと思っていると神山さんは続けて、「子供の頃、大人達から聞いた怒り石の話が本当かどうか、小便をかけたものだった」と言い、「そうしたら本当に雨が降ったよ」と真顔で話してくれた。

大岩観音（おおいわかんのん）

怒り石からさらに登って行くと、道は山道にさしかかる。左側の山の斜面が道に迫って来る所に大岩観音への登り口がある。と言っても、斜面に小径があるわけではなく、本道に面した斜面の草深い所に大岩があり、その上に小さい石の灯籠がある。ここが登り口の目じるしになる地点である。ここからクヌギ林の急斜面を 100 米くらい登った所が大岩観音の岩屋であった。斜面に自然露頭した岩が旨い具合いに組み合わされて、いかにも人工の岩屋のように見える。その中に舟型光背に浮き彫りされた観音像がきちんと納められていた。光背右側には「宝永三丙戌六月廿六日」、左側には「□了□覚禅定尼」と彫ってあるのが読めたが、二文字だけは石が磨耗していて判らない。それにしても誰がこの場所に観音像を祀ったものであろうか。沢地にはこのことについて詳しく知っている人はいないようだ。箱根へ登る旧道の傍にひっそりと立つ観音像は、何か私達の知らない歴史を秘めているように思える。

自然の岩屋の中に立つ大岩観音像。

大岩観音像（高　73cm）

博打石

博打石と言われる岩があった。沢地川が蛇行して旧道と交わった所、石橋の傍である。案内してくれた下里さんの話では、昔は岩の平な面が上を向いていて、岩の上で大人が向いあって座れるようになっていたということだが、現在は動かされて何の変哲もない岩であった。

蜘蛛が淵

山道を更に登ると簡易舗装の農道は切れて、でこぼこの道になる。ここまで来ると、やはり箱根山中に入ったという実感が湧く。沢地川はこの地点でかなり大きな段差の滝となって山中から流れ落ちている。ここが蜘蛛が淵であった。この滝は上の滝、下の滝と呼ばれる二段の滝である。ここで、案内してくれたお二人から、蜘蛛が淵の伝説やらその外いろいろな話しをうかがった。

ウワバミ伝説

昔、三浦某という男が、淵でひとりヤマメ釣りをしていたところ、突然大きなウワバミの影が水面に赤く映った。驚いた男は、釣もそこそこに家に逃げ帰ったが、間もなく、それが元で寝こんでしまった。そしてとうとう死んでしまったので、村人は事件以来この沢を取り憑き沢と呼ぶようになったそうである。

尾張屋源内の仇討ちの水

娘小菊を手打ちにされた源内は、仇敵松平直明の行列を追って裏街道を通り箱根へ向った。その時この淵で最後の水を飲んで行ったと言われている。これは三島でよく知られている伝説「言成地蔵」の一部を補う話しである。

雨乞とサネの水

昭和の初め頃まで、村の青年達は淵に集って雨乞をやったという。と言っても儀式ではなく、夏の一日をここで酒を飲んだり、相撲を取ったり、リクレーションの行事でもあったようだ。

下の滝の左側には、サネの水と言われる細い水が絶えずしみ出ている岩穴がある。サネというのは、この地方で言う女陰の方言である。そう言われて、岩穴を見れば、何やら女陰を連想させる形をしている。この水には、飲めば子宝に恵まれるという俗信が伝わっている。　（次号へ続く）

蜘蛛ヶ淵の滝

郷土史の散歩道 (4)

羈旅中日記

館長　長谷川福太郎

この日記は、かつて「三島聖人」と敬慕された三島学校第一代校長・吉原守拙先生の筆録された、ものである。

三島市誌に依ると、先生は斎藤雪斎の長男として駿河に生まれ、伊豆長岡町の古奈に住まわれたこともあるという。

激しい文武二道の修業の上、江戸に出て幕臣となり、与力の職に就いている。

たまたま、文久3年（1863）2月、将軍家茂の上洛に当たり、その警護の重任をもって、京都に上ることになったものである。

2月9日の早朝、江戸を発って中山道を上り、同月24日京都着、所期の任務に当った。

ところで、家茂は2月13日江戸を後にし、翌3月4日京都着、すぐに二条城に入った。

続いて、4月11日、孝明天皇の石清水八幡宮行幸・攘夷御祈願に供奉し、同月18日海路を江戸に帰って行った。

然し、先生はそのまま京都警備の任を、継続することになっていた。

日記は、往路中山道の旅中はもちろんのこと、京都駐留期間の毎日を、克明に筆記したもので、ゆれ動く世相や、街道筋の景観を捕えた先生の目が、生き生きと映し出されている。以下はその一節である。（原文のまま）

○（文久3年）2月17日

朝飯　汁－菜。皿－ザコ・うなぎの子の如。
　　平－いも・氷豆ふ・大根きりぼし。

歩行にて野尻迄着。亭主云、此の辺より鳥井峠あたり迄寒気別して甚しと。今朝餘程霜降山畑等一面真白し。

上松を出、十二三町越へ浦島の釣場あり。釣場の巌の上に寺あり。寺に浦島の釣竿と唱て蔵す。

釣場には、木曽川の流の岸に怪石ならび連なり切り割りたる如くの巌石有。側に小松気色能はえ、弁天の小なる祠あり。

右の釣場ある寺の前に、ねざめの蕎麥の名物あり。爰を通行し食せざるも残念也とて、同行の者三人この茶屋にしばし休み、そばを二盃食す。

又、この茶屋にて種々のみそ漬物類を商ふ女あり。愛左右至極能し。依てこの女より、柚みそ・ふきみそを五拾文づつ二曲もの買求む。

それより、蕎麥屋の右の脇より浦島の釣場を一見し、間道の径を求め本道へ出んとして行に、道に踏迷ひ、木曽川の流の脇の難場等を漸々越へ、道を求れども何分道知れ難く、桃源か大江山の入口にも行たる心地して、唯木曽川の流の響を聞と、草木聚叢の中を通るばかり也。いろいろ工夫して漸々道を求め本道へ出て、みなみな蘇生したる心地也。

上松より此辺に至る道すがら、追々暖気にて青色良増、道路梅皆開、桜花餘程開きたるもあり。

野尻の手前、くらやみ坂という坂有り。坂を下り終れば野尻宿也。

この途中にて、草履下駄を買い、たもとに入れて行く。九時前野尻へ至り、奥屋太郎左右衛門方へ着、昼支度致す。

野尻宿の昼飯

平－にんじん・里芋・きりぼし。皿－そうだかつを。汁－菜。香物－猪口へ沢庵二きれ。

それより、野尻を出て、十二金村を過、和合の酒有り。此所に休み、和合酒一盃なめる。

又、それを過ぎ和合村と云有り。右の村の茶屋

の左の方に、桜花爛漫として開けり。梅も桜も一同に開き、景色殊によろし。

この度の旅行、此辺に来り初て桜の花の発するを見る。此の辺の気候は餘程本山・福島辺よりは暖也。廿日も先だっと云。

それより、みどのを経、夕七つ時妻籠に至り、大屋曽右衛門方へ着。一同合宿。

夜食。

汁－菜。平－菜・ふ。皿－鮭薄くそぎ酢をかける。

○3月5日

暁雨降。六つ半時頃より雨止。

朝飯

平－竹の子・ふ・ゆば・くわゐ。汁－大根。香物－かぶ・菜。

今日、二条東御門当番、鶏助・秀太郎・銀次郎・於蒐進・次郎兵衛・善平出勤。五つ時交代につき、六つ半時過より出宅。

1、今日惣出仕に付、与力服紗小袖麻上下、同心役羽織。頭は朝出勤、道教夕刻出勤。

1、今日御先手へ北中仕切御門勤番別段に被仰付六日朝勤番所引渡の積に相成。

1、今日揃刻限四つ時、春巌殿・肥後殿・幷御老若方御登城。夜に入候ても御退出なし。

1、石橋殿四つ時御登城。九つ時頃御退出に相成今夜四つ時御登城の御継有之候得共、御登城無之。翌朝六つ半時御登城。

1、御夜詰九つ時過引る。

1、今日当御番に付、旅宿へ二度分弁当申付る。

1、五日夜御門出入はげしく、殊に諸事不取極混雑。夜中一同聊も休息不致候程の儀に御座候。

○4月3日

今朝宮川龍輔来る。烏丸御池下ル町、長安寺の並びに旅宿致居候由。江戸表留守宅より書状到来。湯島辺火事の儀も申来候由　（中略）

其外、異船の事申来候得共、江戸下町辺は餘程騒ぎ候得共、格別の儀無之、其後穏に相成候由。

英国の軍艦浦賀表へ、三十艘程も渡来候得共、諸家の警衛の手当厳重なるに恐れ、鋭気ひるみて見え候由。

右等の趣、父の方より申越候旨、咄有之。

○6月4日　（別日記帳より）

快晴・清暑。藤本津之助を訪、時弊の論有之。

江戸表より乗船にて、小笠原図書頭・酒井飛弾守・水野知連・浅野伊賀守・井上信濃守五人、攘夷の儀説破として来り、伏見に逗留致し候旨、甚以不遜の心得の由話し有之。かつ下関にて、長州家にて異船三艘打候由話有之。

長州にて異船を打候は、五月十日夜・廿三日・廿六日の由。十日打しは墨夷、廿三日廿六日は英夷船の由。

廿三日、廿六日先の船は餘程打込候由。廿六日先より打し玉、下関の港に近く立並びたる町家に二発、港の内にかかり居候加州の米船へ中たり候得共、米船町家共格別の破壊も無之、町家など静りて居り、余り騒がざる由。

長州家の防禦の兵、も早先の様子も知れ候故、恐るるに足らずと、勇気一際ふるい、船の来るを楽しみ待居るよし。

此の後異船渡来せば、乗りつけて打取らんと、勇み進んで待居候趣。

今朝、三浦五助を訪しに、長州下の関にて異船を打し話有之、藤本の話と同様なり。

吉原守拙先生御夫妻の墓　（市内加屋町林光寺にある）

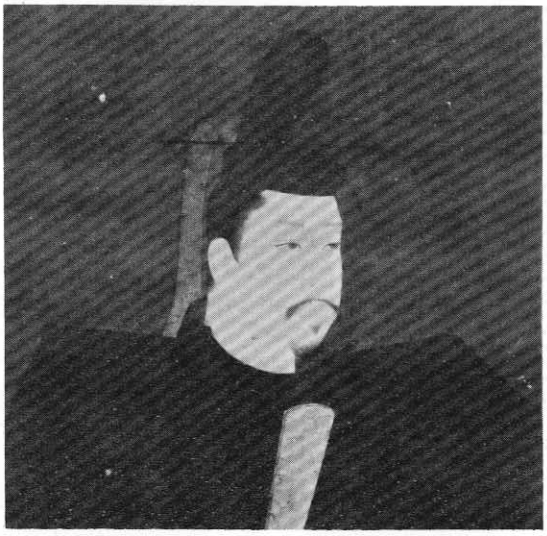
註　この羅旅中日記は、三島市中央町・栗原恒夫氏所蔵のものである。

テーマ展「頼朝と郷土」の報告

昭和54年度の郷土館基本年間テーマ「鎌倉時代の郷土」に関連して、テーマ展「頼朝と郷土」を開催しました。展示品は史蹟のカラー写真パネル、頼朝史話の錦絵、年表、地図パネルでしたが、居ながらにして、三島市、北伊豆、鎌倉の頼朝史蹟と鎌倉時代史が一望できることもあって、来館者には好評のようでした。また郷土館製作の８ミリ映画による史蹟案内も、会期中上映を続け、多くの方々に見ていただくことができました。郷土館では、このフィルムと写真は資料として保管し、機会をみて活用することを考えています。

このテーマ展に、快よく貴重品を提供して下さいました協力者に御礼を申し上げるとともに、今回の展示の一部を紹介して、報告といたします。

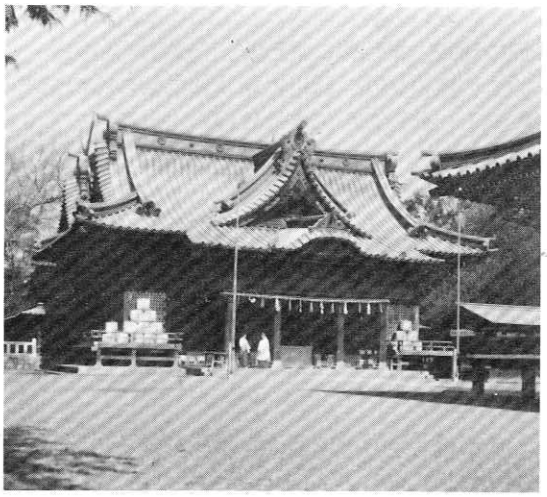
会　期	昭和54年５月15日～７月31日	
協力者	土屋武久氏	三島市大宮町
	山崎ふじ氏	三島市松本
	神護寺	京都市
	三嶋大社	三島市大宮町
	北条寺	田方郡韮山町
	安養院	鎌倉市



頼朝画像　（神護寺）

頼朝の個性をもっともよく表現している肖像画として知られている。

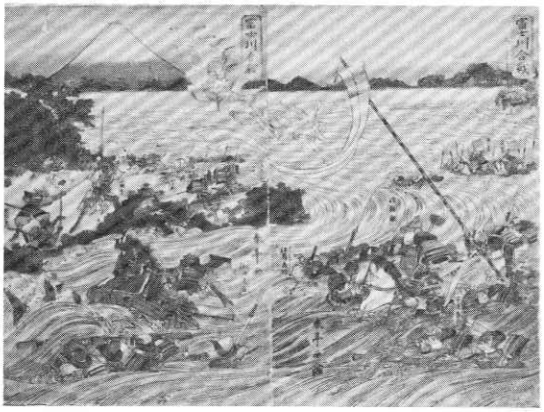
筆者は藤原隆信と伝えられ、国宝の原画は京都市の神護寺に蔵されている。



三嶋大社

箱根・伊豆山両権現とともに、頼朝・政子の厚い信仰を受けた神社である。

境内にある宝物館には、政子奉納の梅蒔絵手箱や頼家の般若心経など、数多くの宝物が陣列されている。



富士川合戦之図　（土屋武久氏蔵）

飛び立った水鳥の羽音に驚いて逃げ出した頼朝追討軍の話しは有名である。この合戦以後、源氏は勢力を増し、平家は西へ落ちることになる。天下分け目の戦いであった。

※郷土館ではこの展示のために、詳しい頼朝・政子関係郷土年表を作りました。お求めになる場合は当館までお申し出下さい。

行事報告

～講座「頼朝とふるさと」報告～

テーマ展「頼朝と郷土」展に関連させた、講師小出正吾氏による、「頼朝とふるさと」講座が開催されました。

6月10日(日)の当日は、定員50名のところ、57名という多数の参加者があり、頼朝の出生、生い立ち、時代背景等から話しが始まり、伊豆の国蛭ヶ小島へ流され、八重姫や政子の熱烈なラブロマンス。34才で旗上げ、石橋山合戦で敗北したものの、平氏の追討軍を追い払い、富士川の対陣、弟義経と対面した黄瀬川の陣、天下分け目の戦いとなった壇浦合戦。そして征夷大将軍に任ぜられ、数年後、橋供養の帰途落馬し、死すまで、約2時間にわたり、歴史、伝説を交じえ話して下さいました。

※なお、3日後、6月13日に行なわれた、「鎌倉めぐり」の参加者も、学習会、説明会を兼ねて、参加している。

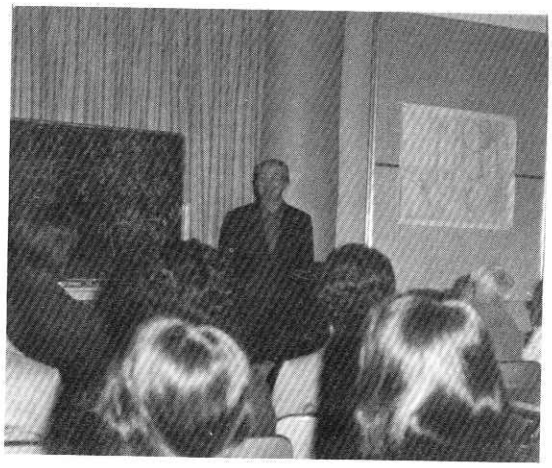
行事報告

県外歴史探訪「鎌倉」報告

―自分の住む郷土をより良く知り愛するために、他所(よそ)を見聞して比較しながら勉強する―

そんな発想から、昨年9月に、初めて、県外歴史探訪の企画が生まれ、今年で2回目です。市の広報により、市民35名を募集し、6月13日(水)に実施しました。市役所のバスで鎌倉へ向い、現地では、明月院、円覚寺、東慶寺、浄智寺、源氏山公園、寿福寺、英勝寺、鶴岡八幡宮と見て回り、鎌倉の往時をしのびつつ、帰途につきました。

（鎌倉市　東慶寺内にて）



（講座風景）

～「頼朝とふるさと」講座より～

“頼朝のふるさと„とは、いったいどこをさしていいのか、まず生まれた場所はどこか、といいますと、尾張の国、熱田と言う事になります。熱田の神宮の大宮司の息子として、生まれたということでございます。そもそも、生れ育ったのは、熱田神宮の今、お宮のほとりに〝タイヘイ寺〟という尼寺(あまでら)、あま寺があって、そこに頼朝が生まれたといい伝えになっている。うぶ湯の井戸という、たいていはあったものですが、まさかわざと堀るものでもないでしょうが、付いてくる伝説です。文献から申しましても、それはまずたしかだろう。それから、だんだん生い立ちましてから、お父さん義朝(よしとも)、お母さんに連れられて、京都に出る。この義朝は、もう、朝廷に任える武士でしたから、京都に出て、頼朝が物心ついて育った環境というものは、京都の都の風土である。あるいは、その風俗であり、時代しかも宮廷を中心とした貴族社会、上層の社会であったにちがいない。これは推定ができる。ところが、ここに頼朝がずっと生い立つことができませんでした。のは、あの〝法元の乱〟ほうげんは、ほげんとも申しますね。〝法元の乱が起きまして、そうして、公家の勢力が、だんだん武家に頼るようになってまいりますと、この〝法元の乱〟の時には、ご承知のように、源平共に戦いましたんですが、いっしょになって、味方になってですね、戦ったんですが、しかし、その源家の内部においては、親族合討ち、血肉、敵同士になりまして、ですから、義朝(よしとも)、為朝(ためとも)は、敵方に回りまして、ついにこの為朝(ためとも)は、豪勇(ごうゆう)の人だったので、これで神の警護ができるかと……

資料紹介

ワタクリ（綿繰）

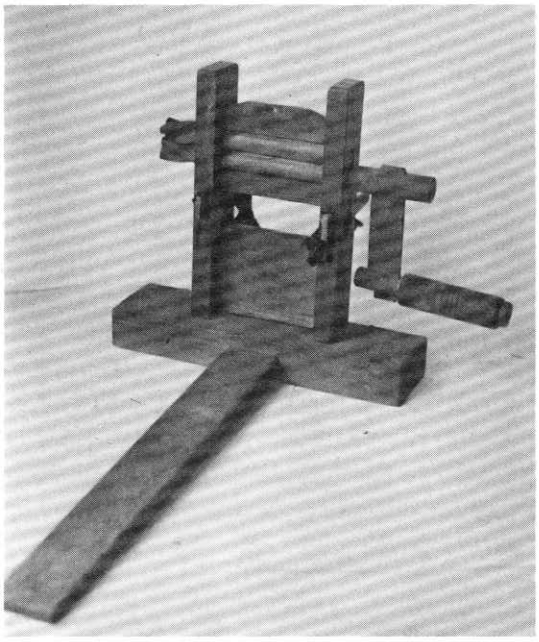
摘んだままの綿花から種子や実のからやごみなどを取り除く道具である。サネクリ（実繰）と呼ぶ地方もある。

片手でハンドルを回しながら、摘んだ綿花を回軽するローラーの間に入れてゆけば、綿と種子が分別されて、綿だけを取り出せるという仕組みの機械である。

初め中国から渡来した攪車（わたくりぐるま）が、18C以後日本で改良されて現在のような型になったと言われている。

自家製の糸を作り、それを織っていた頃は、たいていの農家では、養蚕と共に棉栽培をしていたようだ。それだけに、このワタクリは必需品の農具として備えられていた。

棉は、東アジア原産の植物で、日本に渡来したのは、延暦18年（799)がもっとも古い記録として知られている。江戸時代初期頃、棉作についての耕作法の指導なども行なわれ、麦の表作としてあるいは稲と一年交代で栽培され、日本における棉作の最盛期をもたらした。しかし、明治23～24年を境として、海外からの綿花輸入が増え、国内栽培は、自家製織物用とふとん綿用の栽培に限られてしまった。戦後になってからは、棉の栽培は、ほとんど見られない。



★★★★ おしらせ ★★★★

■郷土館の行事予定■

8月26日（日） 9月2日（日） 9月9日（日） 9月24日（月） 体験講座「縄文土器作り」 （用土作りから野焼きまで）

○9月16日（日） 講座「民俗、芸能」

○9月23日（日） 県外歴史探訪 鎌倉

○10月14日（日） 市内史跡めぐり

○11月1日（木）～55/1月31日（木） 秋季テーマ展「郷土の染と織」

○11月11日（日） 体験講座「草木染めと織」

※申込、問合わせは郷土館まで

■入館者数■

	学生	一般(個人)	団体	合計
3月	3,580	3,251	(6) 613	7,444
4月	2,542	2,959	(2) 317	5,818
5月	4,516	4,554	(4) 235	9,305
6月	1,550	1,998	(4) 148	3,696

■刊行物案内■

○三島小誌㈢「頼朝の時代」 〈領価〉 700円

○三島小誌㈤「三島宿の栄え」 〈領価〉 800円

○テーマ展案内「頼朝と郷土」 〈領価〉 100円

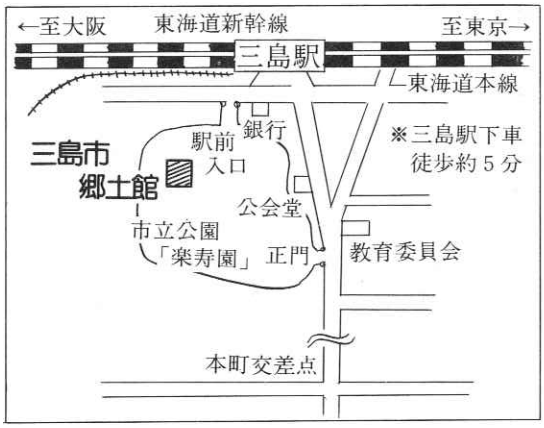
○郷土館「絵はがき」 〈領価〉 200円

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入場無料 （但し、楽寿園入園の際、有料）



郷土館だより No.4
昭和54年8月1日発行
（年3回発行）

編集・発行 三島市 郷 土 館
住所 〒411 三島市一番町19—3
TEL 0559—71—8228